建築における「日本的なるもの」の変遷

姜（カン）　明采（ミョンチェ）
神奈川大学 建築学部建築学科 特別助教／博士（工学）

1　はじめに

人間の生活を支える衣食住は、その国の文化や歴史・風土などが反映され独特な特徴を持つ。とりわけ、「住」に代表される建築の分野では、明治期における社会全般の近代化で欧米の文化が導入され、多様な建築様式が出現し、日本固有の建築様式、いわゆる「日本的なるもの」も模索された。筆者はこの「日本的なるもの」が建築家だけではなく、社会全般で一定の共通した認識があったとの仮説を基に研究を進めている。

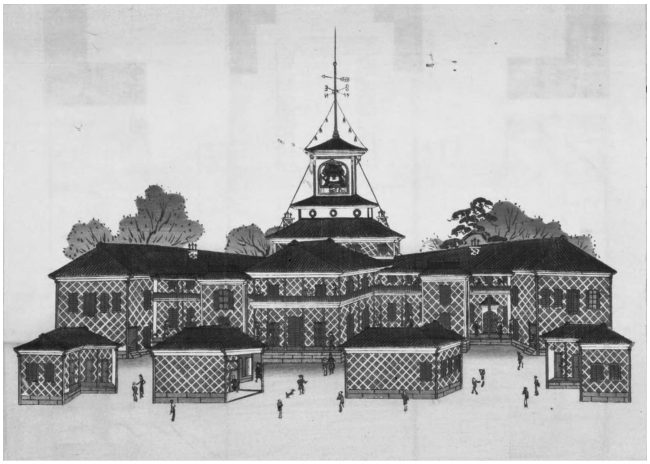

図１　擬洋風建築の代表例である築地ホテル館[3)]

本稿は、ひとまず明治期から戦後にかけて建築家たちが主張した「日本的なるもの」の動向を概観したい。

2　建築における「日本的なるもの」

1）【明治初期】日本人大工による洋風建築から見る「日本的なるもの」

1854（嘉永７）年の日米和親条約によって海外文物の導入が急速に進む中、外国人居住者等によって洋風建築への需要が高まり、外国人の設計による純粋な洋風建築のほか、外国人の下で働く日本人大工が模擬した擬洋風建築が登場した。

擬洋風建築は、高い塔やベランダなどその名のとおり洋風建築を意識しながらも、土壁に漆喰を塗るといった伝統的な左官技術や、民家や城郭等に見る海鼠（なまこ）壁と下見板壁、日本瓦の屋根などの「日本的なるもの」が随所に施された。在来の建築材料や日本人大工が現場経験で習得した在来工法等で伝統的な和風建築の要素を表現した[1)]ことから、「日本的なるもの」を示す一例であると考えられる。

官庁や公共建築を中心に展開されていくうちに住宅建築まで広がり、1877（明治10）年頃にピークを迎えた[2)]擬洋風建築（図１）は、お雇い外国人建築家による専門的な建築教育を受けた日本人建築家の登場につれ、1887（明治20）年頃に終焉を迎えた。

2）【明治後期～昭和初期】日本人建築家による「日本的なるもの」

明治後期は、日清・日露戦争による国粋主義が高揚し、建築界でもそれまで主流であった欧米の様式主義建築と異なる日本独自の建築様式を模索

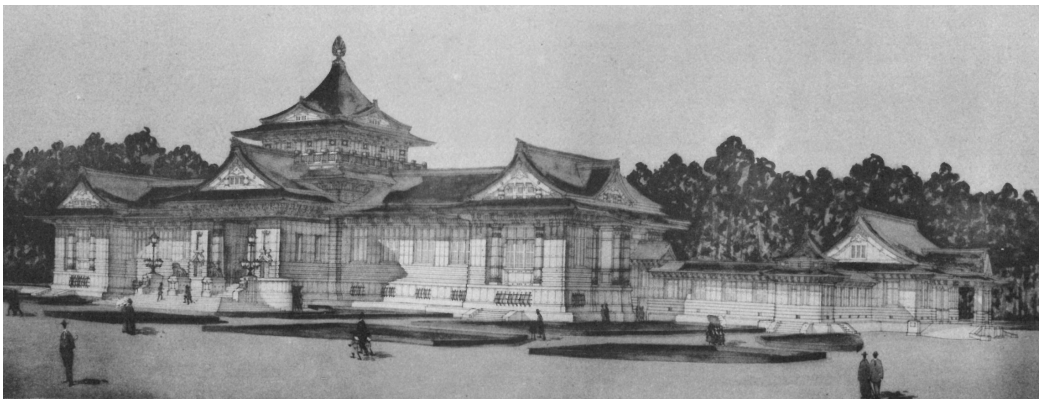

図２　明治神宮宝物殿設計競技一等案の外観パース[7)]

すべきとの意見が広がった。この代表的な出来事として、建築学会主催の討論会「我國將來の建築様式を如何にすべきや」(1910(明治43)年)が挙げられる。国会議事堂の建設に伴い、国民的建築にふさわしい建築様式に関する建築家たちの意見交換が行われる中、出席者の過半は建築様式を「趣味」と結びつける表現を使用した[4)]。この後、伝統的意匠のモチーフを新構造技術で具現するなど、明治後期から昭和戦前期までに日本独自の建築様式、即ち「日本的なるもの」を模索した一連の建築表現と思想は「日本趣味」の建築と名づけられる。

「日本趣味」の建築は公共建築の設計競技で求められることも多く、例えば、1915(大正４)年に行われた明治神宮宝物殿の設計競技では「宝物殿として必要なる儀容を保ち社殿との調和を失はさるもの[5)]」を、耐震耐火性のある建築構造で計画する規定が定められた。この規定に対し、当選案は、深い軒を持つ勾配屋根や繁垂木(しげたるき)・蟇股(かえるまた)・組物(くみもの)など社寺建築で見られる伝統的モチーフ[6)]を「日本的なるもの」として提案した(**図２**)。

当時の建築家たちは、欧米の様式主義建築に基づく建築教育を受け、具体的な形を追求しており、当選案に見る「日本的なるもの」もその延長線上にあったと考えられる。

さて、日本の建築界は1923(大正12)年の関東大震災により大きな転換期を迎える。とりわけ、被服廠跡に建てられた震災記念堂(現東京都慰霊堂、1930(昭和５)年竣工)は、納骨・慰霊・社会教化の機能を持つ、震災の惨禍を記念する前例のない公共建築であった(**写真１**)。伊東忠太の設計による

写真１　震災記念堂　(筆者撮影)

「日本趣味」の建築としても評価されている。敷地中央に建つ本堂は入母屋(いりもや)屋根と切妻屋根を持つ重層構造で正面の唐破風(からはふ)など寺院建築の要素が多用される一方、堂内はキリスト教の教会堂建築に見るバシリカ式を下敷きとした十字型平面で誰もが礼拝できる空間を演出した。背面の三重塔は反りの強い屋根や相輪で中国やインドの寺院建築の影響が窺える。

このように、昭和初期までの「日本趣味」の建築は、社寺建築に見るモチーフを新構造技術でなす造形の再現に注目していたことが読み取れる。

ところで、震災記念堂は竣工まで度重なる設計変更が行われ、その背景には地元住民を始めとした一般の人々による「新時代を象徴する和風デザインの慰霊建築」への要望があった。建築家ではない一般の人々が建築デザインに対し自らの意向を示しそれが実現された、特筆すべき事例として挙げておきたい[8]。

3）【昭和初期～昭和戦前期】時代とともに変化していく「日本趣味」の建築

産業革命の影響で20世紀初頭に登場したモダニズム建築は合理性や機能性を重視し、鉄筋コンクリートやガラスといった新しい建築材料を用いるなど、未来志向の思想であった。歴史や文化によらない普遍性は世界的に広がり、日本でも急速に普及していく一方、モダニズム建築に影響を受けた建築家たちから「日本趣味」の建築に対する批判が起きる。「日本的なるもの」のモチーフとする社寺建築が中国起源であること[9]、木材による社寺建築の表現を新しい建築材料でなすのは非合理的であること[10]が主な理由であった。代案としては、茶室や数寄屋など日本独自の文化で生まれた建築にみる「簡素」・「単純」・「純粋」といった抽象的な概念を提示した[11]。

写真２　パリ万国博覧会日本館[12]

この一例として、国際社会に向けて「日本的なるもの」を発信したパリ万国博覧会日本館（1937（昭和12）年竣工）に注目してみよう（**写真２**）。鉄骨で表現した軸組み構造や、スキップフロアの配置など傾斜地を巧みに利用したことから、構造材が持つ自然美の尊重と自然環境との調和で「日本的なるもの」を表現しようとした坂倉準三の設計意図が読み取れる。

4）【戦後～現在】新たな「日本的なるもの」を求めて―縄文的なものと弥生的なもの―

第２次世界大戦後の日本は国土の再建を目指し、建築界でもモダニズム建築の流行への対抗として風土や歴史を反映させた新たな「日本的なるもの」が問いかけられた。その中心にいた『新建築』の編集長・川添登は、モダニズム建築に代わる方針として伝統を検証するとし[13]、1954（昭和29）年以後の誌上に伝統と創造の問題に関する建築家たちの主張を掲載した。ここで、丹下健三は桂離宮のように繊細で美しい「弥生的なもの」[14]を、白井晟一は農商人の民家のように力強く、野性味

あふれる「縄文的なもの」[15]を「日本的なるもの」として取り上げた。のちに“伝統論争”と名づけられるこの論争は概念自体の対比が明快であったものの、語る立場によってその解釈が入れ替わりがちで、精神性に関する本質的な検討も十分に行われていなかった。

この議論は東京五輪・パラリンピックの主会場となる新国立競技場の建設に際して再び浮上した。2015(平成27)年、国際デザイン・コンクール当選案の撤回による仕切り直しの設計競技で、明治神宮の歴史を継承する「新しい伝統」として日本らしさを求める設計要件に対し、A案は法隆寺五重塔をモチーフとして外周の軒庇(のきびさし)を複数重ねて弥生的要素を取り入れるほか、森に覆われたスタンドで縄文的要素を加味した。一方、B案は縄文遺跡を想起させる大柱でスタンドを囲み力強さを表現し、白磁のようなスタンドで洗練された弥生的要素を加味するなど、両案とも縄文・弥生をモチーフとした「日本的なるもの」を提案した[16]。

3　むすびにかえて

「日本的なるもの」を語る原点は、建築材料や伝統工法を始め、具体的な形の再現から、モダニズム建築の影響で日本独自の建築空間に見る合理性へ移行したのち、縄文と弥生時代まで遡り、造形や建築材料等で表現されている。一方、この根底にある日本人の魂、精神性はいかなるものなのか。例えば「日本的なるもの」の一つとされる木造建築でも木材による造形美に注目しがちであるが、自然素材を尊重する日本人の精神性は同時に検討すべき課題であると考えられる。

日本の建築が世界的に評価されている今、改めて「日本的なるもの」に関する議論が必要なのではないか。

注

1）近藤豊(1999)『明治初期の擬洋風建築の研究』, p. 241, 理工学社
2）藤森照信(1993)『日本の近代建築(上)：幕末・明治篇』岩波新書
3）『東都築地ホテル館之図』差配所, 慶応4 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1306090(2024. 5．6参照)
4）三橋四郎ほか(1910)「我國將來の建築様式を如何にすべきや」『建築雑誌』282, pp. 253–289, 建築学会／酒井祐之助ほか(1910)「我國將來の建築様式を如何にすべきや」『建築雑誌』284, pp. 395–417, 建築学会
5）洪洋社編(1915)『明治神宮宝物殿競技設計図集』
6）藤岡洋保(1987)「明治・大正期の日本の建築界における「日本的なもの」―「日本趣味の建築」―」『日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)』pp. 781–782, (社)日本建築学会
7）注5)『明治神宮宝物殿競技設計図集』p. 7
8）姜明采、内田青蔵、須崎文代(2017)「震災記念堂(1930年竣工)の建設経緯について」『日本建築学会計画系論文集』82(734), pp. 1029–1038, (一社)日本建築学会
9）堀口捨己(1939)「日本の現代記念建造物の様式について」『現代建築』1, p. 6, 日本工作文化聯盟編, 現代建築社　ほか
10）城戸久(1937)「問題の所在」『建築と社会』20(7), p. 33, 建築協会　ほか
11）藤岡洋保(1990)「昭和初期の日本の建築界における「日本的なもの」―合理主義の建築家による新しい伝統理解―」『日本建築学会計画系論文報告集』412, pp. 173–180, (社)日本建築学会
12）坂倉準三(1939)「巴里万国博日本館について」『現代建築』1, p. 13, 日本工作文化聯盟編, 現代建築社
13）岩田知夫(川添登)(1954)「近代主義批判の問題点」『新建築』29(12), pp. 5－6, 新建築社　ほか
14）丹下健三(1956)「現代建築の創造と日本建築の伝統」『新建築』31(6), pp. 29–37, 新建築社
15）白井晟一(1956)「縄文的なるもの―江川氏旧韮山館について」『新建築』31(8), pp. 4－8, 新建築社
16）松田達ほか編(2023)『建築思想図鑑』p. 148, 学芸出版社